

出題分析		
試験時間 2 科目 150 分	配点 50・75 点	大問数 4 題
分量（昨年比較）〔減少 同程度 増加〕	難易度変化（昨年比較）〔易化 同程度 難化〕	
<p>【概評】</p> <p>例年通り大問 4 題だった。固体地球分野、地質・地史分野、大気海洋分野、宇宙分野から 1 題ずつ、今年度も幅広い分野から出題され、岩石・鉱物分野の知識が問われる設問もあった。論述問題は昨年度の 430 字から 370 字へと減少したが、指定字数に収めるのに悩む論述問題が多く、空欄補充問題や選択問題の一部ではかなり細かい知識や考察力も問われた。一方で、描図問題が出題されず、計算問題は昨年度の 5 問から 8 問へと大幅に増加したものの、立式の誘導が丁寧で多くの数値計算が繁雑ではないので、全体の難易度は昨年並と思われる。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
1	沈み込み帯の地震と火山、楔形マントル、発震機構、地震のエネルギー、津波の速さ、緊急地震速報の原理	問 1(ウ)の発震機構はやや細かい用語だが、それ以外の説問で問われているのは基本的な知識のみで、論述も計算も難しくないで、素早く確実に得点したい。(語句 4 問、選択 1 問、論述 1 問(40 字)、整序 1 問、計算 3 問)	易
2	地層に含まれる情報、示準化石、有孔虫の酸素同位体比、炭素 14 法による噴火年代の推定	問 3 は温暖期と寒冷期のどちらかに絞って論述しないと指定字数に収めるのが難しい。問 4 の理由は、試料の周囲との炭素の出入りが停止したのが噴火時であることを論述すればよい。(選択 2 問、論述 4 問(20 字×2・40 字・120 字))	やや難
3	冬季の日本付近の天気図、日本海の筋状の雲の厚さの変化、各地点の気象、地衡風の風速、海上を吹く風	問 2 の論述は季節風が含む水蒸気量の変化に着目する。問 3 は、風向が激しく変化するのが札幌であり、1 日中晴れなのが東京である。問 4 の計算は、距離や気圧の単位に注意する。(語句 2 問、論述 1 問(70 字)、選択 4 問、計算 3 問)	やや易
4	金星、スーパーローテーション、金星の自転の向きと雲の運動、金星探査機の近金点における速度	問 1 は選択肢が用意されているとはいえ、かなり細かい数値が問われる。問 2 は金星の自転の向きと、 $\sin 22.5^\circ$ が $\sin 30^\circ$ より小さいことに注意する。問 3(1)の数値計算はかなり繁雑である。(語句 4 問、選択 4 問、論述 1 問(60 字)、計算 2 問)	難

合格のための学習法

北海道大学の地学では、標準的な知識問題に加え、計算問題、描図問題、論述問題が出題される。「地学」の教科書に記載されている内容を正しく理解するような学習が必要である。特に字数制限のついた論述問題が多く出題されるので、解答のポイントをしぼり、まとめる練習をしておこう。作成した解答を添削してもらうのも良いだろう。また、図から考察するような問題や描図問題にも取り組んでもらいたい。例年、幅広い内容から出題されているため、弱点となる分野をつくらないように頑張してほしい。